

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
October 2022

No.40 【特集】
連携(研究×実践):Tech

連携(研究×実践)の鼎談シリーズ、第2回のテーマはTech。さまざまな社会課題の解決にテクノロジーを用いた活動から、その事例をご紹介します。新連載BOOK REVIEWもスタート。





Sambor Prei Kuk 遺跡群周辺の伝統的建築の家屋。DOOR to ASIA カンボジアでは、伝統的デザインや建築を受け継いでいくことが地域に暮らす人にとっての喜び・誇りにつながるような提案をしました。(P.12参照)

© Miguel Jeronimo IG:migueljeronimophotography

CONTENTS

FIRST WORD ● 藤森照信
新しい試みを求めて 2

特集：連携(研究×実践)：Tech

助成対象者オンライン鼎談

● 阿部真紀 × 櫻井昌佳 × 高岡昂太
一番つながってほしい人につながるために
人の力とテクノロジーをつかって 5
私たちにできること

私たちの取り組み—助成対象者からの寄稿
国際助成プログラム ● 矢部幹治 12
未来への扉を開きその先へ歩みを進める

国際助成プログラム ● 坂本龍太 14
農村における高齢者と若者の
垣根を越えた交流を目指して

「私」のまなざし ● 河野文子 16
マレーシアでイスラム教徒との
触れ合いから学んだこと

トヨタ財団×東京大学未来ビジョン研究センター (IFI)
協働事業プログラム 18
「つながりがデザインする未来の社会システム」

国内助成・研究助成・国際助成プログラム
2022年度プロジェクト一覧 20

BOOK REVIEW ● 永井陽右 24
あるべき方向へ修正し続ける不断の努力

トヨタ財団ジャーナル 25
2022年度研究助成プログラムワークショップ(中間報告会)

作ってきたが、途中から加わったテーマが二つある。一つは、途中というより初期からというのが正確で、処女作から4年後の第二作(タンポポハウス)(1995)において、建築緑化を試みた。建築に植物を植え込む試みは、屋上緑化は例外的にあつたものの、極めて珍しく、この一作が先駆けとなつて何人も先駆的建築家が建築緑化に取り組んで今に至る。

屋上庭園以外の建築緑化は、作る時はいいけれど、その後の管理が極めて手がかかり、失敗の連続となるが、管理体制の整ったところでは何とかなり、(ラコリーナ近江八幡草屋根)(2015)が私の建築緑化の代表作となる。

1 989年、それまで近代建築研究に邁進してきた建築史家は、初の設計に取り組む。生まれ故郷の村落に茅野市が(神長官守矢史料館)設立を計画し、その設計を依頼されたからだ。当初、地元の民家の形式を取り込んだ現代建築を考えたが、すぐつまずく。諏訪大社の筆頭神官を務めた守矢家の歴史はあまりにも古く、縄文時代に届くとまでいわれ、一方、地元の民家の形式はせいぜい江戸時代初期に成立しているからまるで届かない。かといって現代建築のデザインでは、村の周囲の自然の光景を傷つける。過去も現代もダメ。しかも、文化財を容れるため鉄筋コンクリート造でなければならぬ。

進退窮まり、暗い気持ちが続く中で、フト手にした『吉阪隆正集 第4巻』(1986年刊)の中の一文中に救われる。

それは早稲田の建築学生であつた吉阪が、



ラコリーナ近江八幡草屋根



高過庵



神長官守矢史料館

新しい試みを求めて

建築史家・建築家
藤森照信



撮影：鈴木愛子

1941年、卒業論文を書くため内モンゴルに出かけた時の体験を後に記した文で、一部を引く。

「町と草原とが接しているあたりに一軒の小さな泥作りの家があった。それは燕がつくる巣のような印象で、ただ人間が入り込めるくらいの大きさになっていただけだった。入口とおぼしきところに真つ直ぐでない細い木の幹を立て、それに屋根も、手摺り状に一部を削った泥の壁が絡みついて一体になっていた。(中略)意識を乗り越えて、あの姿を作り上げるのにはどうしたら至れるのだろうかというのが、その後いつまでも私の心をとらえた」

吉阪の残した文は大量だが、これに勝る質のものはないだろう。2年後の1939年、丹下健三が「ミケランジェロ頌——ル・コルビュジエ論への序説として」を発表しており、相前後して戦後の日本の建築界をリードする若き日の二人が、それもあまりに対照的な二人が決定的体験と執筆をしていた。

1941年といえば、日本はすでに戦時体制による貧しさと不自由の季節に入っているが、若い才能は「時代を肥やしにすることができると、どんな時代でも」。

吉阪の一文に救われ、過去でも現代でもなく、かつ現代的構造の処女作(1991)を実現することができた。

設計のやり方を具体的に述べると、次のようになる。

- ① 現代建築のデザインは使わない。
 - ② 世界の各地に過去に出現した歴史的デザインは使わない。
 - ③ 現代技術は裏に隠し、見えるところは、土、木、石、草といった自然素材を使う。
- この方法を使い、以後今日までいくつもの建物を

も う一つの新しいテーマは茶室。

といつても伝統的な茶室の延長にはなく、茶人が見たら目をむいて「使いづらい」と呻くようなフリースタイルの茶室を、(新軒)(1997)以後、エンエンと作り続けて今に至る。代表作は(高過庵)(2004)で、この樹上の茶室の写真がインターネットで世界中に広がり、それを見た世界の美術館や個人から依頼があり、今までに、イギリス、ドイツ、デンマーク、ドバイ、インド、台湾などで制作してきた。

なぜ、茶道を嗜むわけでもない私が茶室を作り続けるかという、極小の茶室には「建築の単位空間」という性格があり、さまざまな新しい試みができて飽きることはないからだ。

● 藤森照信(ふじもり・てるのぶ)

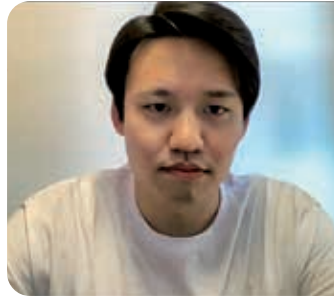
建築史家、建築家。東京都江戸東京博物館館長、東京大学名誉教授、工学院大学非常勤特任教授。日本芸術大賞、日本建築学会賞、日本芸術院賞など多数を受賞。主な著書に『明治の東京計画』(毎日出版文化賞受賞)、『建築探偵の冒険・東京篇』(サントリー学芸賞受賞)などがある。トヨタ財団では1995年の成果発表助成など複数の助成対象プロジェクトがある。



阿部真紀

Abe Maki

2021年度国内助成
デートDVチャット相談シ
ステムから、学生と共に創
る人と人が繋がる社会



櫻井昌佳

Sakurai Masayoshi

2021年度特定課題先端技術
と共創する新たな人間社会
テクノロジーを活用した
“誰一人取り残さない新し
いメンタルヘルスケア”



高岡昂太

Takaoka Kouta

2018年度特定課題先端技術
と共創する新たな人間社会
福祉分野における自治体の
デジタルトランスフォー
メーション促進の課題整理

[助成対象者オンライン鼎談]

一番つながってほしい人に
つながるために

人の力とテクノ ロジーをつかっ て私たちにでき ること



司会：加藤慶子
(トヨタ財団プログラムオフィサー)

今回は、デートDV防止、自殺念慮予防、児童虐待防
止という社会的課題の解決に向け、テクノロジーを積
極的に活用したプロジェクトを推進し、またそれらに
関連する事業の代表としても活躍されている3名に、そ
れぞれの視点からお話していただきました。

それぞれの活動紹介

はじめに、みなさんの自己紹介をお願いします。

高岡 高岡です、よろしくお願いたします。
株式会社INCZという、児童虐待に対して
テクノロジーを使い、現場の方々が取り組ま
れている課題解決の伴走支援、それからサブ
スクリプション型のプログラクトを提供するス
タートアップを経営しています。私自身の
バックグラウンドは、臨床心理学です。臨床
心理士、公認心理師として現場で働きながら、
特に児童虐待をテーマに児童相談所や、医療
機関における虐待の対応、それから性暴力を
受けてなかなか事実をお話するのが難しい子
どもに対して、専門的に被害事実を聞き取る
司法面接という仕事をしてきました。
私自身が科学者兼実務者というところもあ
りますが、それを少しでも現場の皆さんに届
けるために、今度は経営者として起業する立
場を通して、サービスを全国に実装してい
きたいと思、事業をすすめているところです。
阿部 阿部です。認定NPO法人エンパワメ
ントかながわで10年ほど理事長をしています。
私自身はCAP(子どもへの暴力防止プログ
ラム)というアメリカから来たプログラムを
1999年からはじめました。夫の赴任で海
外生活が長く、日本に帰ってきて何をしたら
いいんだろうというときにCAPに出会いま
した。そんななか、CAPのスペシャリスト
たちがもって自分たちでプログラムを開発し

【特集】

連携(研究×実践)：Tech

トヨタ財団では「研究」から「実践」までさまざまなタイプのプロジェクトへの助成を行っ
ています。便宜上、プログラムの枠組みは分かれています、それぞれのプロジェクトを
みていくと「研究」と「実践」が明確に分けられるものばかりではありません。双方の要素
を織り交ぜながら、さまざまな専門家が集まり、各々の特性を活かした取り組みは数多く
あります。特に複雑化した事象を扱う場合は、研究者と実践者の連携は不可欠と言えるか
もしれません。

特集「連携(実践×研究)」の2回目は、そのなかでも「テクノロジー／科学技術」を活用
した取り組みに注目しました。テクノロジーを用いて社会的課題の解決に挑む際に、実践
と研究はどのように連携しうるのであるのか。その取り組みを持続可能なカタチで発展させるため
には何が必要なのか。さらにそれを社会の価値として広げていくためにはどうすればよい
のか。社会的課題に向き合うプロジェクトの多くは、強い使命感をもち、社会貢献活動に
邁進しようとする一方で、営利／非営利を問わず持続性のある事業としての体制づくりも
求められています。プロジェクト代表者との議論から、ソーシャルグッドな取り組みの実
情と展望を探ります。



特定課題
「先端技術と共創する新たな人間社会」
応募期間：2022年11月30日(水)まで



特定課題
「外国人材の受け入れと日本社会」
応募期間：2022年11月19日(土)まで

現在応募
受付中



●阿部真紀(あべ・まき)
認定NPO法人エンパワメントかながわ理事長。CAP(子どもへの暴力防止)スペシャリストとして、これまで10万人以上の子どもたちに出会ってきた。また、デートDV予防プログラムを開発し、提供。実施者養成講座、電話相談員養成講座、相談対応専門研修の講師を務める。2018年NPO法人デートDV防止全国ネットワークを設立し、事務局長。著書「暴力を受けていい人はひとりもない」(高文研)。2021年度国内助成プログラム「デートDVチャット相談システムから、学生と共に創る人と人とが繋がる社会」代表。

て提供しようという流れになり、エンパワメントかながわを2004年に立ち上げました。どんなプログラムを作ろうかと考えたときに、ちょうど出会ったのがデートDVという言葉でした。皆さんデートDVという言葉はご存知ですか？学校の先生がたを対象に行なった研修でデートDVという言葉を知っていますかと聞いたら、4割くらいはご存知ありませんでした。まだまだそんな感じなのですが、私自身はこの言葉はとても画期的だと思っています。暴力に名前がついたらそれなくしていくことができるけれど、名前がなければ、なんだかよくわからないモヤモヤのままです。暴力をふるわれていても、相手を好きだからしょうがないのかなというところに対して、デートDVという言葉を得たんですね。それをプログラム化して、10代のうちにデートDVをなくすことができれば、その先に続いていくDVや虐待もなくなることができると考えて予防プログラムを始めました。

ものすごく大変です。デートDVは、本人は気づかなくても周りは気づくんですよ。それと同じで虐待も子どもは気づいてないかもしれない。櫻井 我々の場合、最初からコンセプトとして決めていたのは、自分たちだけでやらないということ。ラストワンマイルの接点を持っているところと組むと決めていました。巨大なテックプラットフォームと組まないで絶対には届けないと思っています。医療インフラにしていくなかには自分たちだけでは無理なので、カウンセリングをしているNPOや、テックプラットフォームを持っているIT企業と組むという戦略に振り切ろうとしています。

阿部 それが本当にできたらすごいですね。でも、どうやってたらそのような大企業から支援をもらってこられるんですか。デートDVに関しては、それは個人の問題で企業のようにところが関わる問題ではないと言われてしまいます。虐待も自殺もそうかもしれません。個人の問題だと言われていることに對して、私はそうじゃない、暴力の問題なんだから社会が向き合う課題なんだと言いつづけているのですが、個人の問題として片付けられることが多いなと思っています。

櫻井 単にお金を出してもらおうというのは難しいかもしれないので、CSR的な取り組みの中で一緒にできますよという視点から説得したいと思っています。高岡 阿部さんの視点は、どうやって目の前の困っている人たちに届けたいものを届ける

トワークというものを設立して、その事務局長を務めています。どうぞよろしくお願ひします。

櫻井 一般社団法人ZIAI代表の櫻井と申します。私は人事が専門で、かれこれ約10年ほど、特にIT企業の経営者をクライアントにもつサービスを生業としています。ZIAIでは、自然言語処理とITのシステムを使って、どうやってオンライン相談の応答率を上げられるか、ひいては、どのようにテックを使って自殺念慮の予防につなげていけるかということに取り組んでいます。

平成30年度の調査結果で、オンラインチャット相談の応答率が約2%から21%しかなく、80%ほどの問い合わせに対応できていないことがわかりました。接続順に回答していくため、緊急性が高い人からのSOSに十分に対応できていない可能性があったのです。そこで、カウンセラーに属人的に蓄積された暗黙知をシステム化することにより、問い合わせ内容などから相談者のリスクを自動

とはいえ、実際にはデートDVは起きていますので、デートDV10番という相談窓口を作りました。それでも足りなくて、デートDVの専門相談員というところまでやり、まだ足りなくて、デートDV防止全国ネット

測定し、緊急性が低い方にはAIでの対応、緊急性が高い方にはプロのカウンセラーや必要な組織につなぐといったシステムを構築しました。カウンセラーの人数は限られていますが、このシステムを導入することで最大限に問い合わせに対応することができます。ZIAIとは別に、インドなど途上国をメインにスラム街におけるレイプ予防策を開発するNPOもやっています。

ラストワンマイルをつなぐために

高岡 僕ら全員に共通するところとして、デートDVの相談も、自殺予防も、児童虐待

に関しても、サービスにつながるラストワンマイルの部分、一番つながって欲しい人にサービスを届けるにはどうしたらいいかというのとはとても大事なポイントだと思っています。領域は違いますが一緒に学び合えるところもあるかなと思ったので、ぜひ阿部さんと櫻井さんの知見やお考えをお伺いできたら嬉しいですね。

阿部 デートDVの場合は、デートDVという言葉すら知られていない場合があります。当事者は自分が我慢すればいいと思っているので、「あなたは悪くありませんよ」と言う、「そうなんですか？でも私がいけなかったんですよね？」と本当に気づいていない人がいます。そういう人でも相談に来てくれたらつながることがあります。そう考えると、つながっていない、あるいは気づいていない人がどれだけ多いのかなと。気づいてもらうのは

かというところをとっても大事になさっていて、人材育成もされている。櫻井さんは日常にビジネススキームやテクノスキームを使って、気づいたらサービスが溶け込んでいたみたいな形を想定している。双方、一緒に組むるところもありそうだなと思いました。

児童虐待に関してアメリカの例を挙げると、性虐待を見つけたときのデータを分析すると虐待を受けた子どもが自分からそれを開示することはあまりなくて、むしろAちゃんがあんなことされているらしいよ、と友だちが言っているのを聞いて通告に上がることが多いということがわかります。特に中高生たちは発達の先生は「うざい」と思っているから話さないですし、親にも話しません。

ではどうしたらいいかというと、性教育のときにデートDVを受けたら誰に相談すればいいかということも必ず入れておくことです。本人がDVを受けていなくても、周りに相談したときにつながるような枠組みのほうがあるという研究結果が出ています。本人に直接届けるわけではなくて周辺からじわじわいくというスタイルは、新しい時代のスキームとしてはいい方向性なのではないかと思

います。櫻井さんの知見と阿部さんの経験の蓄積は両方とも大事なので、一絡

テックを活用した教育の可能性

高岡 私は心理の分野を大学で学んできたので、男性同士でも結構デートDVなどの話をしました。授業で習ったことについて友だちと話すので、それって彼女にしたらDVになるよねとか、こういうのはいけないよねというような会話が日常的にありました。でもそれはある意味特殊な例なのかもしれません。そういう情報に触れる頻度を増やして日常に溶け込ませるといえるのはかなり大事だなと思います。感度が上がっていると、駅にポスターが貼ってあったとか、相談したいときは東京都ではここに電話をするんだとか、そういうことを意識できるかもしれません。こうい

にやっていくスキームを組むと、かなりパワフルなインパクトを生みそうだなと思ひ、ワクワクしながら聞いていました。

阿部 ありがとうございます。お力を貸していただけたらとても心強いです。

櫻井 そうですね。でも私がいけなかったんですよね？」と本当に気づいていない人がいます。そういう人でも相談に来てくれたらつながることがあります。そう考えると、つながっていない、あるいは気づいていない人がどれだけ多いのかなと。気づいてもらうのは



●櫻井昌佳(さくらい・まさよし)
非営利テック団体ZIAI代表。商社やIT業界で人事経験を積んだ後、途上国スラム街における世界初のレイプ予防メソッドを開発するNPO法人Gawainをインドで設立。それらNPOの経営に加え、IT企業の組織デザインを専門とする株式会社CRY4の代表取締役社長を務める。2021年度特定課題先端技術と共創する新たな人間社会「テクノロジーを活用した“誰一人取り残さない新しいメンタルヘルスケア”」代表。

うことはやはり初期教育がかなり重要です。

阿部 その通りで、教育に取り込んでいく転換期なのかなと思うのですが、今の先生たちである大人世代がそのような教育を受けてきていないので、なかなか難しいんです。

高岡 今ある既存の教育にそれをお願いするのは、エクストラの業務になってしまふのではなかなか難しいかもしれませんが、海外では幼稚園から性教育をしています。はじめはNPOなどがやっていて、結果的に価値が認められて教育に取り込まれていくような感じだったと思いますので、日本でもそのようなようになると思います。

会社を立てる前に仲間とNPOで活動していた頃、「学術たん」という勉強系のTPOのようなツイッターアカウントがたくさんあって、子ども虐待対応のアカウントを作って運営していました。リタゲティンクなども含めて定期的にツイートをしていくと結構リツイートがついていました。何がインパクトがあるのかなと分析していたときに、もし友達がそういうことになったら、どういうふう話を聞いたらいいかというふうな、ちょっと具体的な情報がたくさんツイートされるので、具体的に相談できる連絡先がわかる3分程度の動画をYouTubeに載せて、それを見てもらったらどこに電話をしたらいいかわかるようになりました。困っている人にこんなYouTubeがあるよ、と伝えてもらう形でつなげてもらったところ、「にんしんSOS」の方に、動画を見て来ました、というような相談が増えましたと言われました。動画を見た病院や学

校の先生から聞いたという人もいたようですが、デファクトスタンダードを取るような枠組みで、テックとしてSNSを活用すれば既存の先生とやれることもあるでしょうね。

櫻井 私は自分の中で使っているフレーズがあって、マインドセット介入と環境介入と呼んでいます。インポートでレイプ予防の問題に取り組んでいるときもそうなのですが、99.9%みんなマインドセット、教育にどう介入するかみたいな話をします。

でも、一方で環境をどうつくるか。要は犯罪者が犯罪をするハードルを上げるための環境を作るとか、デートDVをしたくならないような環境を作るみたいなことも大切だと思います。中学生から大学生くらいの若いカテゴリーに対して、そういう行為はグサイという認識にどうやったら持つていけるかという発想にする。たとえば、若者に人気のインフルエンサーがそういう話をふいにしてくれるとか。DVしてたなんて超グサイとか、もうあいつと遊ぶのはやめようぜとか、そういう話がインフルエンサーから出るだけで、若い人にとってはかなり強いインパクトがありそうだなと。少し違う角度からのアプローチをして、そういう行為をしにくい環境を作るといのは、一つの発想としてあってもいいのかなと思います。

阿部 中学生100人を前にして、私が「嫌よ嫌よは……」と言って、その先を知っていますかと聞くと、口を揃えて「好きのうち」と答えるんです。これは昭和の時代のインパクトですよ。それが令和の時代にもまだ本当につながるのかどうか。私から見ると高岡さんはものすごい事業家に見えるので、そのノウハウを教えていただきたいです。うちではこれでご飯を食べられている人がいないので、ぜひそうできるようにしたいと思っています。

高岡 スタートアップ庁創設の準備がされていたり、リスクマネー供給拡大の重要性について言及したり、政府としてもスタートアップ推進に大きく動き出そうとしているとは思いますが、一方でスタートアップや事業化することは大きなリスクも伴うので、ご飯が食べられる以前に会社が潰れ、負債を負ってしまうといった事態もあります。

支援のためのお金ということで考えると、トヨタ財団にはさまざまな助成プログラムがありますが、各フェーズに応じ、実証実験から事業化に向けたファイジビリティの評価があっても面白いかなと思っています。研究は0から1を作るのと1から1000にするのでは主眼におく力点のベースが違います。J

STのような大型予算はそのあたりを分けていますが、何をもってファイジビリティを評価するかというフレーム自体はまだあまり醸成されてないような気がしているのですが、場合によってはリード／アーリー期に支

残っている。だから「嫌よ嫌よは好きのうち」と思ったら、みんなが性暴力をしいことになるんだよ。そうじゃなくて、「嫌よ嫌よは嫌なんです」って覚えてね」と中高生たちに話しています。

高岡 声を揃えて言うてもらうのなら、何人が「好きのうち」と言ったのか見える化したいですね。音声のポリウムでもいいし、単語も自動で拾えるようならワードクラウドでもいいかもしれません。そうすれば、あてつけではないですが、何人くらいレイプの強要やDV被害者になりそうな人が潜在的にいるかもしれないということが可視化できます。「好きのうち」と言った人たちが悪いわけではなく、知らなかったからこそそうなので、どうしたらより良く変えられるか、またはそういうことが起こったらどうするかというような話ができると、自分ごと化して考えられると思います。

事業の持続可能性とマネタイズ

高岡 一つ質問させてください。マネタイズのところで行政と組むか企業と組むか、やはりサービスの持続可能性を考えるとときにはそういうところはものすごく重要だなと思っています。海外だとESG投資やソーシャルインパクトの部分が少ない進んできて、お金も入ってくるけれども、日本はまさにこれからそういったところを変えていかないといけない時期になってきています。僕らは社会課題に向き合っていくステークホルダーとし

援するような助成金があってもいいのでは。ファイジビリティが高いと評価されたところには、5年や10年の長いスパンで助成できるようなフレームがあれば、世の中全体を変えるような取り組みには財団の皆さんも一緒に巻き込めると面白いのかなと、ジャストアイデアですが思いました。

櫻井 我々は非常に優秀なエンジニアをヘッドハンティングしてくる、かつ非営利型の法人を作り、いろいろなところと協力しながら作っていくということを最初に決めました。もちろん営利企業としてお金を稼ぐことはできると思うのですが、たとえば高岡さんの会社のようにサブスク型のサービスを作っていくとなると、今の我々のこのコンセプトで体制を作るのは多分諦めざるを得なくなると思っています。

高岡さんはそもそもどういう戦略計画をされていますか。

高岡 研究者としてやってきたときのように、元々は外部研究費を獲得して今のプロジェクトをやっていたかと思っただけですが、二つ課題があったと思います。一つ目は予算を取るときには単年度で評価されたり、新規性が高いものしか予算がつかなかった。二つ目は企業と組んでやろうと思ったのですが、企業は顧客管理ソフトを売ればいいという考えになってしまいがちです。それは事業として正しいとは思いますが、子どもを守る社会はどうあるべきかというビジョンに共感して一緒にやることが想像しづらかったので、スタートアップとして自分



●高岡昂太(たかおか・こうた)

株式会社AiCAN「すべての子ども達が安全な世界に変える」代表取締役。東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース博士課程修了。教育学博士、臨床心理士、公認心理師、司法面接士。産業技術総合研究所人工知能研究センター主任研究員を経て、2020年3月株式会社AiCAN設立、2022年4月株式会社AiCAN代表取締役(CEO)。2018年度特定課題先端技術と共創する新たな人間社会「福祉分野における自治体のデジタルトランスフォーメーション促進の課題整理」代表。

たちでやっていくことになりました。ただ、残念ながら福祉系の事業だとなかなかお金にならないという市場になっているので、本当にやるの？と悩んでしまっているのですが、櫻井さんと阿部さんのお話がとても良いと思うのは、いろいろな人やセクターを巻き込んでいくことを考えておられるところです。

戦略計画としてはソーシャル系サービスは社会になくはないインフラや福祉なので、政策方針・経済合理性・サービスの価値をつなげ、そこを担保できることがウェルビーイングを高めることにつながります。キャピタリズムの中でも、ソーシャルキャピタルと地域の関係性が、住みやすい自治体、住みやすい地域というところにつながっていくと思うので、会社のコミュニティだけではなく、生活空間の中に少し広げていけるようなサービスを、いろいろなスタートアップと組んで、そういったところを解決できるスキームを考えています。

政策提言に向けたスキーム

社会課題の解決に向けていろいろな人たちを巻き込みつつ、実践と研究を繰り返して、最終的に政策提言などを行えば大きなインパクトにつながるのではないかと思います。そこに向かうために必要なものや、こういうところが困っているといったようなことはありますか。

阿部 私たちの相談システムを売り込むために、47都道府県ごこの自治体にも電話をか

然超えています。だから国レベルでやらなといけませんし、日本語だけでやる必要もありません。チャットだったら翻訳、変換していけばいいだけのことですから。でもそんなに簡単に国は動いてくれません。DV、虐待、ストーカー、セクハラ、リベンジポルノ、これらはどれも関連する法律がありますが、デートDVは未だに法律になっていません。政策提言をして国を動かすためにもNPOの全国ネットワークを作りましたが、国を動かすつもりでもすごく大変だと実感しています。

櫻井 自殺予防も、たしかここ10年くらいでようやく取り組みが認められて、助成金が出るようになったみたいです。この界限の先輩と話していると、最初5年くらいは無給でやったという話を聞きます。多分彼らが悪戦苦闘してきた道を、今デートDVを主戦場に置いている阿部さんが戦っておられるんですね。

高岡 日本国憲法の第16条に請願権というのがあります。何かを変えていくためにこうやっていきたいので審査していただきたいと請願する権利を国民一人ひとりが持っています。ただし一人の請願だけではつながらないので、Change.orgや署名などで社会を動かしているたり、政治家たちとつながっていくようなやり方もあると思います。

阿部さんのデートDVを何とかしたいというところと、櫻井さんがおっしゃった自殺念慮まで変えていきたいというところは、総じて社会を良くしていくことに近いなと思っています。それぞれの団体が誰を巻き込むかで

けて営業をしています。両手かなりの行政委託事業を取らないとまわっていかないと思っているのですが、そのためには知らせるしかありません。一生懸命電話をかけて、独自でやっているチャット相談システムなので安全だしお得ですから、お宅の自治体独自でモデル事業をしませんか、と宣伝します。私たちが政策提言をしてエビデンスを取ったからといって、自治体は「はい、わかりました。では導入します」というようなことはなくて、お金がないんですってという人だったり、熱意など、実はそういうものが入り口になりやすいかなと感じています。

高岡 おっしゃる通りですね。あとはよその自治体でもやっているかということをとて大事にされているように思います。それから現場の共感を得られるかということと、政策に合うかどうかのフィードバックをとても大事にされていると思っています。一方でメリットとしては、価値を感じていただと年間を通してサービスを使っていただけなので、価値を出していくような現場とタッグを組んでいくような座組の生成が本当に大事だなと思っています。

櫻井さんは将来的に政策提言につなげていきたいというときに、こういう絵を描いていこうというのにはありますか。

櫻井 先程申し上げたNPOに協力していただいてという座組では、正直に言うとう相談受付率を100%にできないのではないかと最近思っています。というのも、カウンセラーや臨床心理士、精神科医など我々が手

はなくて、Facelookのような考え方ですが、僕と阿部さんと櫻井さんがつながったら、それぞれの思いに共感してつながって一緒に仲間になれて巻き込んでいけるみたいなスキームがあったらすごいなと、あくまでイメージですが、そんなふうにいるながら聞いていました。

櫻井 あとやはりPRもとても大事で、人が何を欲しているか、それに対して何を守らなければいけないかということを設定で考えると、組む戦略の相手が見えてくるかもしれませんね。

実践者・研究者、それぞれの視点から

いろいろなお話をありがとうございます



取り合って進める必要があるプロの皆さんは、我々が見えないリスクを敏感に感じ取ることができると、NIAが取り組む新施策に対して懸念を示されることも多く、技術的にはすぐに実現できるのに、なかなか導入できないケースが多いからです。やはりリスクを伴うものなので、反対されることがとても多いです。相談者に対して応答前の事前質問を1個加えるだけでも半年や1年かかります。この状態で想定した期限内に目標を達成できるかなと考えたときに、多分難しいよねと話をしています。

今回、同時並行で進めようとしているのが、国全体の相談窓口を一本化するトリアーラの戦略です。SNS相談は一瞬で一本化できます。

阿部 いのちの電話への若年層からの電話がものすごく減っている、だからSNSが必要であると新聞で読みました。今時の子は電話なんてしないですからね。

櫻井 それもありますし、相談窓口への電話の接続率が5%ほど、場合によっては2%くらいで、かけてもつながらないんですよ。

阿部 デートDV110番のチャット相談は都道府県ごとになっています。なぜかと言うと、今のところまだ国がお金を出してくれないので、都道府県からまず進めようということになったからです。オンラインであれば全世界どこからでもつながれるのに、千葉県の人は千葉県でしか受け付けませんなんてナンセンスです。デートDVは遠距離で交際していても起きていますから、都道府県なんて当

た。最後のPRの件も大変興味深くてもう少しお聞きしたいのですが、時間が来てしまいましたので最後に一言ずつお願いいたします。

高岡 普段自社事業の中で、どうやって広げていくかとか、価値を出しているかというところを考えていることが多かったのですが、今日は同じように社会課題を解決されようとしているお二人と、仲間というか戦友のような感じでお話させていただきました。何かを変えていくときには人の力、そして熱量を僕は信じているところがあります。そういう面でも今日いろいろなアイデアをお話させていただいて、ちょっと俯瞰して見ないといけないかと改めて思いました。

阿部 たくさんのアイデアをいただきありがとうございます。テクノロジーの方面から私が提案することはできませんが、皆さんと何かできたらいいなと思いが、ブレインストーミングのような時間でとても有意義でした。何かされるときはぜひ私も巻き込んでください。

櫻井 今日日本でやっているNIAという活動に関しても、インドでやっている活動についても大変勉強になった時間だったと思います。自分は研究者というより実践者のほうがマインドとしては多いかと改めて感じました。私自身が実践する中で、結果的に後からみるとこれは研究だったなという、実践ありきの研究がとても重要だと捉えていたので、今日お二人の話をお聞きしながら、引き続き実践を頑張ろうと思いなおせた時間になりました。

※本オンライン座談会は、誌面に載せきれなかった内容を含めた拡大版をウェブサイトに掲載する予定です。

私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿

海外との連携が不可欠となる国際助成プログラムではコロナ禍で難しい活動が迫られています。そのような中でも次のステップへと歩みを進める矢部さんと坂本さんのお二人からご寄稿をいただきました。



2019年度国際助成プログラム
「助成題目」デザイナー滞在型事業を通じた地域の中間プレイヤー育成と国やセクターを超えた学び合いのプラットフォーム創出

未来への扉を開き その先へ歩みを進める

● 矢部幹治 (DOOR to ASIA)

敢えて開催しない期間

DOOR to ASIA(以下DTA)は、2015年に東北の三陸地方で始まった、国を超えた相互の信頼関係を大事にするデザイナーズ・イン・レジデンス。アジア各国のデザイナーたちが一定期間、一つの地域に滞在し、その地域に眠っている可能性と一緒に見つけ、デザインを通じて事業者/コミュニティとの間に小さくても確かな、未来の「扉」を開くプログラムです。東北から日本各地、そしてアジアの地域での開催により、信頼の輪が少しずつ広がっています。

各地域で実施する中で、「外と内をつなげる人」、地域の事業者や住民の価値観を理解し、持っている資源を大切に活用するため、外部人材とのコーディネートができる「中間プ

レイヤー」の存在が、地域と寄り添っていく上で重要な役割を担うことに気づきました。

トヨタ財団との取り組みでは、国内外デザイナー滞在型事業を通して、地域の「中間プレイヤー」の育成と国やセクターを超えた学び合いのプラットフォーム創出に取り組んでいます。

当初インドネシア・カンボジアの2か国でプログラムを予定していましたが、2020年からのコロナウイルス感染拡大の影響で、渡航・滞在での密なコミュニケーションを大事にしている我々のプログラムは、延期または実施方法の再考を余儀なくされました。我々プロジェクトチームの中でも、「オンラインで本当の交流ができるのか」「今までと同じ交流が達成できるか」という意見や、チームの中の生活の優先順位の変化がありました。

は遺跡そのものの価値はもちろん、遺跡が属する地域の自然や暮らし、そのなかに宿る文化とのつながりという、この地域だからこそ伝えたい魅力があります。下記4つのテーマに導いてくれるキーパーソンを立て、地域の魅力を4チームに分けて一緒に発見してきました。

「農・食/土とともに暮らし続ける」「精・魂/土地の物語と生きる」「住・景/暮らしのなかに宿る魂」「街・関/まちの物語をつなぐ」カンボジアの都市部や海外から訪れるクリエイターたちが、前半3日間でそれぞれの視点で見えて体験し、発見した価値をどのように伝えていくのかのコミュニケーションデザインを、その後の2日間で提案をしていきました。「農・食」は、文字に残さない原住民の生き方や文化を学べるカードゲームを提案、「住・景」は伝統建築を受け継ぐことが村の

今まで、DTAの輪を広げることばかりを考えていたのかもしれない。料理で例えるところということだったのだと思います。「食材に味が染み込むのは、熱が与えられているときではなく『温度が下がる時』。冷めていく(放っておく)時間が長ければ長いほど、味は染み込む」。敢えて開催しない(放っておく)期間は、今振り返るととても重要だったのだと思います。

みんなで一緒に考えていくDTAカンボジア
2021年、各国で地域・住民のために「今できること」にチャレンジしているDTAは、過去参加した仲間たちを紹介し、コロナ禍でのクリエイティブの役割をシェアする、オンラインイベント「Knock! Knock!」を開催しました。各回、タイ・インドネシア・カンボジア・フィリピン・インド・シンガポール・マレーシアと、国ごとに違った状況、さまざまなアイデア、それぞれコロナ禍で新しく始めたことをシェアしてくれました。共通するのは「自分を大事にし、自分の周りを大事にすること」。大事にしている考え方やアイデアを通して、相互扶助・双方向の交流をオンラインでも見出すことができました。

会を重ね、お互いの理解が深まり、2022年頭からカンボジアに10年以上住む人々の喜び・誇りになり、訪問者と双方向の会話ができる「Shine」を提案しました。それぞれの提案の根底には、その地域・住民がプライドを持ち、一緒に育てていくことを大事に考えています。

コンポントムでの発表会は、地域の人が集まれる場所のパゴダ(寺院)で行いました。さまざまな世代の方々が同じ高さの床に座り、僧侶にも来ていただき、子どもたちが駆け回り、犬もいて、素晴らしい発表の機会となりました。発表後、地域のキーパーソンの一人が、「この開いたドアをこれからどうするかが大事」と言ってくれました。今年9月に、参加したカンボジアのクリエイティブチームが、また仲間を連れて地域の人々とワークショップなどを開催してくれました。これらのアイデアの種がどのように育っていくのが楽しみです。



彼女が信じるもの・拠点・自身の役割・どんな仲間がいるのか、生きていく術を持つているマスターや、その術や知恵をどのように伝えていくかなど、たくさん話をみんなですべてしてきました。

「農・食」「精・魂」「住・景」「街・関」

今回舞台となったコンポントム州には Sambor Prei Kuk という、1000年以上前に王都だった遺跡群があり、カンボジア国内で3番目に登録された世界遺産です。大都市から離れた地域だからこそ、土地に根ざした暮らしの姿や風景・生業・食など、固有のゆたかさに満ちた場所ですが、現代社会の加速度的な成長のなかではそうした「暮らしや土地に宿る物語や魂、哲学」は見えにくくなっているからこそ伝えづらく、忘れ去られる危機の中にあります。

こうした中で Sambor Prei Kuk 遺跡群に



①世界遺産の Sambor Prei Kuk。②パゴダ(寺院)での発表会。③Tシャツを製作。クメール語で「どこ?」という意味で、村の人々と一緒に魅力を発見していく。(プログラムの詳細はDTAのフェイスブックページをご覧ください)
※右ページ写真についてはP.3参照



農村における高齢者と若者の垣根を越えた交流を目指して

●坂本龍太（京都大学東南アジア地域研究研究所）

国を跨る課題

過疎、離農、高齢化の課題は、我が国のみならず、他のアジア地域でも顕在化してきている。我々が主な調査地としているブータンでは、全国調査が行われた2017年の時点で総人口に占める65歳以上人口の割合は5・9%と報告されているが、東部ではインドとの門戸サンドウップ・ジョンカル県以外の全県で高齢化の基準である7%を上回っており、五年間の人口千人あたりの移住も県内に移住してくるよりも県外へ出る人口が多くなっている。そして、我々が連携するタシガン県カリン地区では2017-2018年のカリン地区の登録された農耕地3539・054エーカーのうち92・4%（水田81・4%、畑92・5%）にあたる3268・525エーカーが休耕地となっており、空き家と耕作放棄地が目立つようになってきている。

相互交流

我々は共通の課題を抱える人間同士が国境

を跨いで直接交流し、当事者意識を育みながら解決策を協働で模索することが重要であり、大学はその核を担いとうと考えている。2019年2月には京都大学国際交流科目「ブータンの農村で考える発展のあり方」と連携しながら、土佐町ウエブマガジン『とさちようものがたり』の編集長で写真家でもある石川拓也氏をブータンにお連れした。東部にあるブータン王立大学シエラブツェ・カレッジを訪問し、写真や映像記録などを用いた土佐町での取組みを同校の学生に講義いただいた。タシガン県の小学校や診療所を訪問後、西部に戻り、総理大臣を座長とする政策諮問機関である国民総幸福委員会などを訪問した。同年3月にはブータン保健省から2名を招聘し、高齢化、過疎化の進む京都市南丹市美山町の美山診療所などを訪問し、事務長の原龍治氏より診療所の変遷や取組みなどを説明いただき、意見交換を行った。

また、同年7月にはブータンからシエラブツェ・カレッジの大学教職員、バルツァム郡長、NGO関係者、農業関係者、ミャンマー

あるという答えがあり、井出氏や河島氏から学ぶところが大きいという声があった。

察したバルツァム地区長ケザン・ダワ氏の協力の下で、我々と一緒にバルツァム地区に民俗資料館を創設しようとしている。そして、日本の高齢者施設の専門家による現地高齢者施設の視察により、移乗用ボード、手すり、非常時にスタッフを呼ぶための呼び鈴の設置などブータンですぐにでも役に立ちうる専門的助言があった。また、日本側からブータン側に対して介護を行う上でのやる気の維持に

その矢先に起こったのが、COVID-19の感染拡大とミャンマーの政変である。COVID-19により、我々のチームのミャンマーのカウンターパートの一人が亡くなられた。京都大学でも海外渡航は原則禁止となり、2020年2月の渡航後、ブータン及びミャンマーとの間で予定していた招聘及び渡航を中断した。ミャンマーでの軍事クーデターの後、カウンターパートの一部との間で連絡が取れなくなってしまった。ミャンマーからの招聘及びミャンマーへの渡航を断念し、現在も活動再開の目途が立っていない状況である。



①国民総幸福委員会との会合（2019年2月）。②美山診療所にて（2019年3月）。③宮津市上宮津地域の自然体験ツアー（赤松芳郎氏撮影。2019年8月）。④保健省との会合（ティンブー、ブータン。2020年2月）。

新しいつながりへ

そんななかでも、ここで育まれた構想を実現するべく、2022年3月1日よりブータン王国を対象国としたJICA草の根パートナー型プロジェクト「東部タシガン県における大学—社会連携による地域づくりに関する人材育成開発支援」を開始することとなっ

からマウービン大学及び農業関係者を日本に招聘し、南丹市美山町知井地区、守山市速野地区や宮津市上宮津地区、世屋地区、下世屋地区、日置地区、木子地区などの過疎・高齢化集落を訪問し、かやぶきの里、有機農業、造酢などを視察、かやぶきの里、大川の夏休み自由研究室イベントやエコツアー、林道整備、下草刈り作業などを実際に体験いただき、公民館などで意見交換を行った。同年12月にはマウービン郡保健局などから職員を招き、宮津市保健福祉部や京都市の老人ホームなどを訪問後、国際ワークショップを行った。そして、2020年2月には土佐町及び京都市の高齢者施設の井出正氏、河島久徳氏をブータンのプナカ県リンムカ地区に誕生した高齢僧のための入居施設にお連れし、現地スタッフや保健省との間で意見交換を行った。

育まれた芽と危機

相互交流を通して、さまざまな構想が持ち上がった。具体的には、2019年5月にブータンの国民総幸福指標を参考の一つとして作成された土佐町幸福度調査が行われた。これは石川氏のブータン訪問前から進んでいた話であるが、『とさちようものがたり』を介して、ブータンでの見聞も発信され、調査の実施に活かされた。

また、ブータンのバルツァム地区から来られ、日置地区で有機農業を目的の当たりにしたブンツォ氏は、ブータンでも有機農業を実践しようとHappy Farmers Groupを立ち上げ、共にかやぶきの里の美山民俗資料館を視

た。その目的は、その名の通り、ブータン東部タシガン県において大学と社会の連携活動を行いながら地域づくりを担う人材の育成及び開発を支援することである。日本では地域と大学が連携したさまざまなカリキュラムが実行されているが、ブータンではまだあまり見られないため、三年半という限られたプロジェクト期間ではあるが、シエラブツェ・カレッジと協働で、そのモデルを創るべく地域と大学が連携した実習を行う予定である。

バルツァム地区で農業を営む高齢者へのインタビューからは、バルツァムの土地が都会に比べ市場へのアクセスが悪く、さまざまな設備が貧弱で、イノシシやシカによる被害がひどく、水不足の問題もあるが、野菜にとっても人間の暮らしにとっても気候は良好であり、この土地で十分にしあわせに暮らしていくことは可能であるという答えや、若者に都会に行つてほしくない、都会に出た若者には戻つてほしい、という思いを抱いているが、あまり干渉するのは良くないので強く言うのはためらっているという答えがあった。

守山市の高齢者からは、ブータンやミャンマー、日本の大学の学生が来て、地元の子どもたちなどとも一緒に踊ったり、食べたり、歌ったりすることで、人間同士の新しいつながり、交流が生まれてくることへの喜びの声も聞かれた。我々にできることは限られているかもしれないが、我々のプロジェクトが、国境を越え、農村において高齢者、若者が垣根を越えて交流するきっかけとなればありがたいことである。

私 は2014年に、京都大学とアジアの大学で同時に2つの修士号を取得できるダブルディグリープログラムを使ってマレーシアのマラヤ大学に約1年留学しました。アジアの多くの国に旅行や仕事で行ったことがありましたが、マレーシアには一度も行った事がなかったのですが、なぜか直感的に、そのプログラムにとっても興味を持ちました。その半年後には、マレーシアに留学することになりました。

実際にマレーシアに留学してみると、目からうろこなことだらけでした。最初は、人々の外見の違いが目につきました。熱帯の国で、毎日の気温が35度ぐらいなのに、マレー系の女性はいつも全身が隠れる長袖、長ズボンまたは長いスカートと、頭にはヒジャブというスカーフを身に付けています。暑いのか、がまんしていないのかなと、最初はネガティブな見方をしていましたが、カラフルな色のヒジャブを身に着けたイスラム教徒の女性を見る中で、彼女達は宗教で決められたことを守りながらファッションとして楽しんでるんだなと理解を深めていきました。

マ レーシアの大学では、何かのイベントがある度に参加者に食事が無料で提供されます。コロナ前でしたので大勢でかこんで食事をしながら、いろんなことを話して過ごすのがマレーシア人は好きなのでしょう。多くの場合、提供される食事はピュッフェスタイルで自分の好きなものをお皿にとって、好きなだけ食べられるシステムが人気です。人気メニューはチキンをスパイスと煮込んだ

生もいたため、彼女に聞くと、イスラム教の教えを守りながら日本に住むのには、多くの困難が伴うことを知りました。そこで、外国人イスラム教徒が日本で具合が悪くなった時に、日本の病院を受診する際には、どのような悩みがあるのかについて、京大の教員になってからの初めての研究課題として実施することにし、トヨタ財団の助成プログラムに応募しました。

イ スラム教徒が日本の病院を受診する際に困ることトップ3は、同性の医療者による診察が受けられないこと、入院時の食事としてハラール料理を選べないこと、病院でお祈りを行うことができないことです。イスラム教の厳密な決まりでは、女性は家族以外の異性に手のひら、足と顔以外の体の部分を見せてはならず、それは医師の診察を受ける際にも例外ではありません。日本で病院を受診する際、これを実行するのは多くの場合、難しいです。看護師の多くは女性ですが、医師や検査技師の多くは男性です。比較的若い世代で持病もなく、年に数回、かぜや腹痛などの軽症や健康診断などで病院を受診するのであれば、そこまで厳密に考えなくても良いのではないかと、日本人ならば考えがちです。しかしイスラム教徒にとっては、そうではないのです。

また、ハラール料理にしても同様です。たった数日間の入院生活の中で取る食事がハラールでなくても、その時だけ少しがまんして食べたり、豚肉だけ取り除いて、他の料理は食べればよいのに、と日本人だと考えて

私のまなざし 34

マレーシアでイスラム教徒との 触れ合いから学んだこと

文・写真 ● 河野文子

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻国際化推進室



チキンとスパイスの煮込み料理が人気



大学のイベントでの食事の提供



お店にはカラフルなヒジャブが売られています



マラヤ大学の学位審査会を終えて

料理でした。

イスラム教徒が食べて良い食事のことをハラール料理と言います。ハラールは「神に許された」という意味です。ハラール料理とは、イスラム教において許された食事をとることを意味します。イスラム教徒が豚肉とアルコールを摂取しないということは、イスラム教に詳しくない方でも知っているのではないかと思います。豚以外の肉についてもイスラム教徒は、同じイスラム教徒によっても精肉処理がされた肉以外は食べてはいけないという厳密な決まりがあります。

イスラム教徒は1日5回のお祈りを欠かしません。大学で、お昼前後の時間帯になると、ふと1人、また1人、それぞれのタイミングで部屋からそっと出ていって、15分ぐらいいたらかえってきます。祈祷室でお祈りをしていたのでした。マレーシアでは大学やショッピングモール、病院など、あらゆる公共の場には、祈祷室があります。家や宗教施設にいる時だけでなく、時間になったら外出先でもお祈りをするという習慣は、日本人の私からしてみれば、なぜそうしないといけないのか不思議に感じる出来事でした。

マ レーシアでの留学期間はあっという間に過ぎ、私は日本に帰国後、京都大学で博士課程に進学しました。帰国後は、それまでは自分の意識の中にはなかった、日本に住んでいるイスラム教徒の方々の生活に興味を持つようになりました。

私と同じ様に、ダブルディグリープログラムを使ってマレーシアから京大に留学した学しまうかもしれません。しかし、イスラム教徒にとっては、それは神との契約に背くことを意味し、命の危険がない限り、入院時もハラールな食事の摂取を厳格に守り続ける必要があるのです。

お祈りにしても、病院に行かないといけない日ぐらい、例外としてその日、その1回だけ行わなかったとしても、何も変わらないのではないかと、日本人なら思いがちです。しかしイスラム教徒にとっては、日々行っていることを行うことができないこと、宗教上、守らないといけないことが守れないことに対しては、自分に課せられた責任を果たせていないような気持ちになるということです。

私 はイスラム教徒ではありません。しかし、ご縁があって、マレーシアに約1年間住んで、イスラム教徒の方々と触れ合う機会があり、イスラム教徒の考え方を知らず、自分の世界が広がりました。

ですから、学業や就労、その家族など、さまざまな理由で日本に来て暮らしている外国人イスラム教徒の方にとって、少しでも不便さをとりのぞいたり、快適に日本で暮らしてもらえるように、情報を発信したり研究として取り組んでいくことで、少しでも恩返しができるかと考えています。

● 河野文子(この・あやこ)

2019年度特定課題「外国人材の受け入れと日本社会の助成対象者。助成題目「日本の医療が東南アジアのイスラム圏出身者にもより良いものとなる為」——混合研究による双方向「コミュニケーション戦略と社会実装」

チャン・シンホア
江 欣樺

東京大学未来ビジョン研究センター特任研究員。台湾出身。社会学を軸に、水環境保全や農村計画など多様な課題を研究してきた。現在は環境科学と市民社会の繋がり方を考察している。都内の吹奏楽団のトランペット奏者。

〈研究計画テーマ〉

持続可能なリンの循環ネットワーク構築：物質－技術－社会の重層的考察とシナリオ検証

〈プロジェクト紹介と抱負〉

持続可能な水資源及び水環境管理には、リンの管理が重要な政策的、技術的な課題になっています。農畜産活動に由来するリン（農薬、肥料）、及び都市活動が吐き出すリン（工場排水、洗剤）は、用水路から流域に拡散し、富栄養化の要因となっています。その一方、リンは有限資源であり、その枯渇が食糧生産の危機に導いています。本プロジェクトは重層的／循環的なネットワークの視点から、物質環境、科学技術と政策、及び市民社会の相互作用過程を解明し、シナリオ分析により改善案の設計と検証を行います。研究方法としては、マルチエージェント・ダイナミクスをはじめ、質的・量的両手法で分析し、ネットワークのモデル構築と実装可能なシナリオを開発しています。

具体的には以下の3項目を課題とします。①リンに関する物質環境、政策形成とステークホルダーのネットワーク考察。②ネットワークの改善に向けたシナリオの構築とシミュレーション。③シナリオの実装検証、及び応用可能な分析モデルと改善策の提案。ネットワークの視点で複雑な関係性を解明するほか、シナリオ検証により、一般市民など非専門家の参入可能性を提言し、政策形成と管理技術の質向上を目指しています。

〈佐野さんへの応援メッセージ〉

初日から明るく優しく接してくれて、人見知りだった私には心強いです。研究の話から雑談まで何でも共有できる仲間として、世界に一人だけの同期が佐野さんでもう最強です。これからも一緒に楽しく頑張りましょう！



台湾新北市ピンリン区

特任研究員2名が 着任しました！

トヨタ財団は東京大学未来ビジョン研究センター（FVC）と協働し、研究助成プログラムの新テーマ「つながりがデザインする未来の社会システム」のもと、社会システム変革に向けた研究に取り組み研究者を長期雇用し育成する協働事業プログラムを開始いたしました。2022年4月より東京大学未来ビジョン研究センター内にて研究活動をスタートされたお二人に、プロジェクトの紹介とお互いへのメッセージをお寄せいただきました。

協働事業プログラム「つながりがデザインする未来の社会システム」

トヨタ財団×東京大学未来ビジョン研究センター（FVC）



さの・ゆうき
佐野友紀

東京大学未来ビジョン研究センター特任研究員。専門は農業経済学。日本の卸売市場やオランダの競売組合を対象に、農業における仲介市場の役割を研究してきた。現在、生産者と消費者をつなぐ仲介者の役割を探求中。

〈研究計画テーマ〉

仲介者の視点から、自然とのつながりと、しなやかな地域の未来をデザインする

〈プロジェクト紹介と抱負〉

今日、何を食べましたか？ 食材の産地がわかる贅沢な食事でも、簡易さが第一優先の食事でも、その消費の背後には食料を供給する自然と生産者が存在します。日本には卸売市場が存在し、いつでもどこでも食料を手にすることができます。一方で、その恒常的な便利さと引き換えに、生産に携わる必要のなくなった人々と自然との隔たりを深めているとも捉えられます。農業生産では環境保全が叫ばれる一方、生産段階以降のどの行動が環境負荷の増大に加担しているのか。未来の社会システムに向けて、卸売市場に代表される自然と人をつないできた仲介者の役割を紐解くことで議論の一助となる指標が提供できるのではないかと考えました。

本プロジェクトでは、質的・量的な社会科学の研究手法を用いて、①環境負荷を軽減できる仲介者の行動とは何か、いかに促進できるのか？ ②環境保全ができる食の輸送形態とは何か？ という課題を解明します。さらに、仲介者を含むステークホルダーとのワークショップを開催し、包括的かつ実装可能な方策の提言を目指します。産地と消費地、自然と人の関係が従属関係になく、双方が豊かさを享受できる仕組みや支援方策を提案する研究を行いたいです。

〈江さんへの応援メッセージ〉

隣の席の江さんは、同じ対象地を見ても社会学の視座から異なった側面を捕捉されていて、遠くない専門分野でありながら常に刺激をいただいています。プロジェクト完遂まで一緒に頑張れたら嬉しいです！



上：市場の仲介者と堆肥場の視察。下：オランダの時計のセリ会場にて。

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
栗林 知絵子	としまこどもつながるプロジェクト ー地域一体で子どもを支えるプラットフォーム	550	東京都
村田 修治	こども×まちプロジェクトinあだち ーつながりが未来をつくる！	540	東京都
久高 友嗣	キャンプが生む自治基盤組成の検証と実践 ーリアルとネット、業界や地域を往き交う共営	360	沖縄県

研究助成プログラム

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)
綿村 英一郎	児童相談所の後方支援を担える社会システムの構築	650
松永 伸太郎	趣味縁の場としての消費空間の可能性 ー アニメファン経験をめぐるメディア環境と都市の産業編成への複合的アプローチから	580
富永 京子	空き家・空き店舗の活用による都市コミュニティ形成 ー 若年自営業者の創造的労働と協同の場として	160
中島 徹	自然領域における大規模先端計算機資源ネットワーク構築に立脚したニューノーマル時代のフィジカル・サイバー空間の実証的融合	720
永代 友理	偏在から遍在へ ー AR技術とICT技術を活用した、病院の枠組みを超え手技を三次元共有する医療手技教育プラットフォームの構築	520
小野 悠	ニューノーマル時代の地域自治デザイン ー 自治会DX社会実験を通じて	700
石川 英里	発達障がい児の養育者支援 ー 自助グループ型支援プログラムの開発、社会実装、効果検証	620
下谷 晃司	東京都内の主要青果物卸売市場内における食品ロスの発生原因と発生量調査、並びにそれらの有効活用方法に関する研究	350
町田 怜子	半自然草地の保全にむけた炭素主流化によるカーボンオフセット創出 ー 温帯域最大の野焼き草地・阿蘇での検証	700

国内助成・研究助成・国際助成プログラム

2022年度プロジェクト一覧

2022年度に採択された国内助成プログラム11件、研究助成プログラム9件、国際助成プログラム9件のプロジェクト一覧です。

※掲載内容は2022年9月28日時点の情報です。各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

国内助成プログラム

1) 日本における自治型社会の一層の推進に寄与するシステムの創出と人材の育成

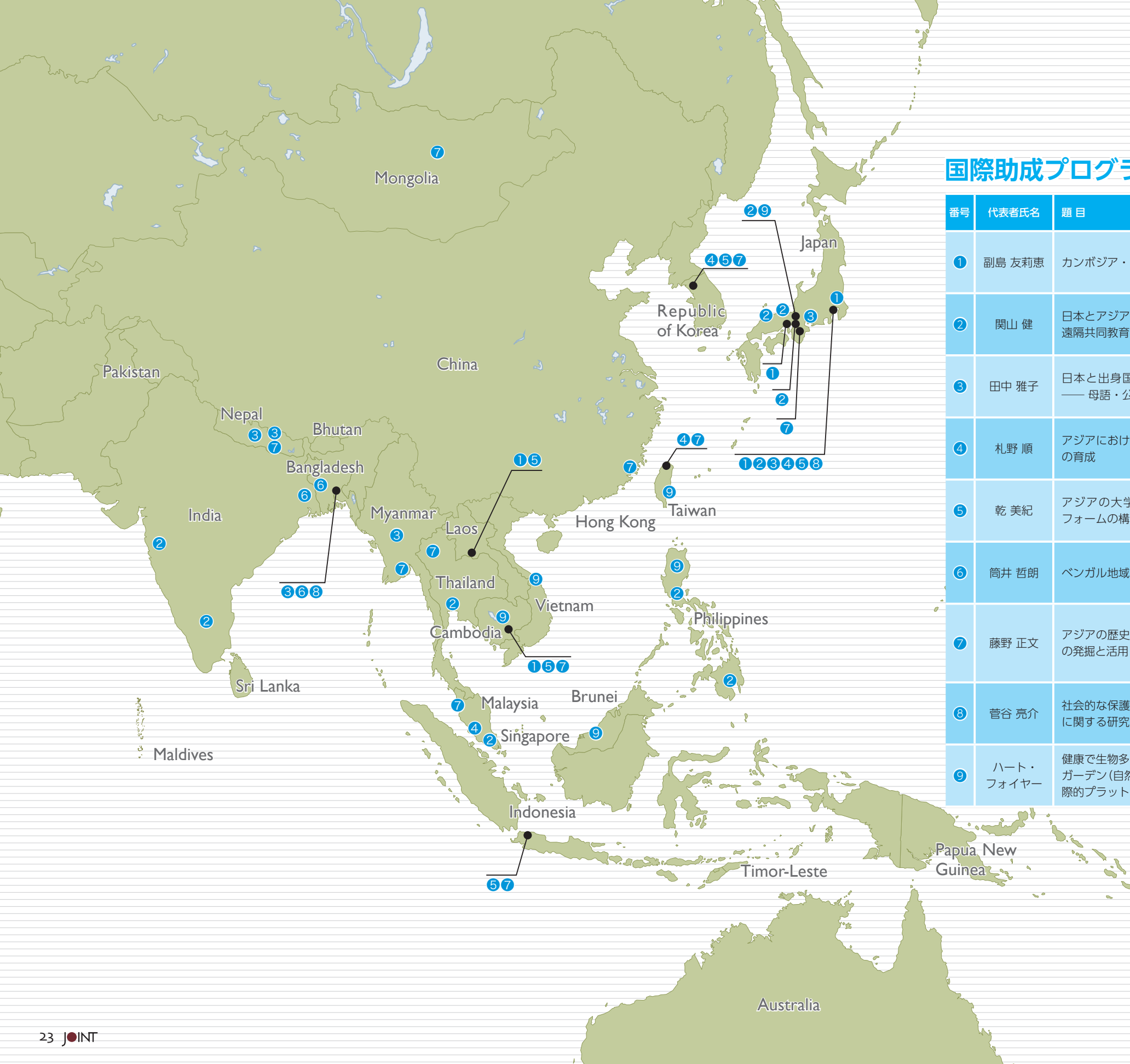
代表者氏名	題 目	助成金額(万円)
小笠原 敏記	「いわて防人リーダー BANK (防災の学び・交流の場)」プロジェクト	1,997
丑田 俊輔	新たな自治のあり方を探究するエコシステムの構築 ー 実践・学習・研究開発の循環	1,962
斎 典道	子どもの孤立を防ぐための協力・共創プラットフォームの構築プロジェクト	1,768

2) 地域における自治を推進するための基盤づくり

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
盤所 杏子	風水害飛騨PROJECT ver2 ー 地域コミュニティの新しいあり方	536	岐阜県
石井 勇	ケアから始まる自治、共同体形成へむけた「チーム鞆岡」セルフアセンブリー	396	宮崎県
平田 未季	演劇を通じて作り上げる！当事者による当事者のための草の根共生政策	510	北海道
嶋渡 克顕	自治型社会を担う地域マネージャーの育成プログラムの構築及び配置プログラムの設計	537	島根県
永島 匡	町田みんなのお出かけモビリティネット(まちモビ)	520	東京都

国際助成プログラム

番号	代表者氏名	題目	助成金額 (万円)	主な活動地域
①	副島 友莉恵	カンボジア・ラオス乳がん診断のための病理人材育成プロジェクト	700	カンボジア、ラオス、日本
②	関山 健	日本とアジア諸国との学び合いによる国際的な越境テレワーク普及に備えた遠隔共同教育プログラムの開発	700	日本、フィリピン、シンガポール、タイ、インド
③	田中 雅子	日本と出身国を往来する移民の子どもの社会再統合を見据えた言語教育—— 母語・公用語の補習教室を地域の「多文化共生」の拠点に	1,000	日本、ネパール、バングラデシュ、ミャンマー
④	札野 順	アジアにおける研究公正推進のための国際フレームワークの構築と専門人材の育成	700	日本、マレーシア、台湾、韓国
⑤	乾 美紀	アジアの大学生をChangemakerにするための国際交流と教育プラットフォームの構築	700	ラオス、カンボジア、インドネシア、韓国、日本
⑥	筒井 哲朗	ベンガル地域における気候変動適応農業への対策の確立	800	バングラデシュ、インド
⑦	藤野 正文	アジアの歴史都市における市民ワークショップ方式による潜在的な地域資産の発掘と活用—— 社会的つながりの再生強化を目指して——	800	日本、ネパール、中国、モンゴル、韓国、台湾、マレーシア、インドネシア、カンボジア、タイ、ミャンマー
⑧	菅谷 亮介	社会的な保護へのアクセスが困難な子どもたちのメンタルヘルスとその対策に関する研究調査—— バングラデシュと日本の子どもを例に	800	バングラデシュ、日本
⑨	ハート・フイヤー	健康で生物多様性に富んだアジアのフードシステム構築に向けた「ワイルド・ガーデン(自然植生の農園)」の活用—— 科学と少数民族をつなぐ越境的・学際的プラットフォーム	800	マレーシア、台湾、カンボジア、フィリピン、ベトナム





◆今号の一冊「開発協力のつくられ方：自立と依存の生態史」

あるべき方向へ修正し続ける不断の努力

●永井陽右（NPO法人アクトセプト・インターナショナル）

2017年度 研究助成プログラムの成果物として発行された書籍について、永井陽右氏（2020年度国際助成プログラム）に書評をいただきました。



●書名：開発協力のつくられ方：自立と依存の生態史（日本の開発協力史を問いなおす7）
●著者：佐藤 仁
●発行：東京大学出版会
●価格：税込4,400円

日 本の国際協力の歴史は、日本が敗戦から立ち上がったってきた歴史でもある。戦後賠償を含む欧米諸国からのプレッシャーを受けながら、日本の取り組みは経済協力、開発援助、開発協力と徐々に成長し今日に至る。本書はまさにこの歴史を、生態学的視座から分析し、開発協力における自立と依存の関係性と予期せぬ結果を鮮やかに説明する。

そもそも日本の国際協力的ないし開発協力は、戦後日本の経済再生のための不可避の選択肢であった。欧米を意識しつつ、東南アジアからの原料を確保するとともに、東南アジアの輸出市場の確保こそが、日本の援助の出発点であったのである。その日本が援助してきた東南アジア諸国は、今では援助国となりつつある。本書は、ここに自立と依存の連続性を見る。援助の文脈において依存という言葉はネガティブなものに聞こえるが、事実として、日本はもとより東南アジア諸国の自立への道のりを振り返ると、そこには国と国レベルでの依存と国の内部における重層的な依存が見出されるのである。また、そうした開発協力における予期せぬ結果

果についても本書は主張する。日本の開発協力は長らく「顔の見えない援助」と批判されてきたことは有名だ。独裁政権への援助やひも付き援助比率など、当事国の人々を無視しているように見えざるを得ない開発協力事業が多かったのも事実だ。誰のための援助なのか、こうした問いは今にも続く永遠の問いであろう。

本書は問題案件として名高い事業をフィールドワークとともに分析をする。そこで明らかになったことは、計画していなかった、予期していなかった結果である。それはいくつもの問題案件が優良化、つまり人知れず軌道修正され良い影響をもたらすものになっていったということである。批判などに端を発し、人々の絶え間ない関わり合いの中で軌道修正がなされていったことに、現象としての開発の輪郭が見えてくる。国、市民、土地、文化などさまざまなファクターが多層的に関わりあうということ。そのすべてを案件形成時に推し量ることは決してできない。だからこそ、そのプロセスの中で絶え間ない対話をし、完全には計算できない軌道があるべき方向へ修正し続ける不断の努力が必要なの

である。本書はそこにおいて関わる人々の相互依存と信頼、そして摩擦や障害を乗り越える意思が必要とするが、まさしくその通りだ。さて、こうした軌道修正において本書は市民社会からの批判の重要性も最後に指摘する。ODAの性質を鑑みれば、健全なジャーナリズムよろしく適切な批判機能は健全なODAの執行において無敵不可欠なものだ。しかしながら、今日ほどに市民社会による批判というものが再検討されなければならない時代もないだろう。というのも、SNSの時代においては、匿名者を含む誰もが発信者となり、情報の真偽を越えて不適切な批判や誤解が広く拡散されるリスクが常に存在するからである。また、ディープフェイクや陰謀論など明確な意図を持った不適切な攻撃も散見される。ここから見えることは、数十年前にも増してあまりにも一方通行であるということだ。

どのようにして適切な批判機能を立ち上げていくか、そして批判が起きた際にどのようにして軌道修正に繋がる豊かな対話を形作ることができるか、こうしたことが今問われている。

THE TOYOTA FOUNDATION
トヨタ財団
ジャーナル
October 2022



REPORT



研究助成プログラム
2022年度研究助成プログラム
ワークショップ(中間報告会)

2 022年8月21日、六本木の国際文化会館にて2021年度研究助成プログラム「つながりがデザインする未来の社会システム——ニューノーマル時代に再考する社会課題と新しい連帯に向けて——」の助成対象者による、中間報告会を兼ねたワーク

ショップを開催しました。2021年秋の助成開始以来、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により贈呈式やイベントなどは常にオンラインで行われてきたため、みなさんに実際に集まっていたのは今回が初めてのことでした。

当日は、一部オンライン参加者を含み、コメントーターとして選考委員長で京都大学大学院の中西寛先生をはじめ、国立環境研究所の亀山康子先生、東京大学大学院の佐倉統先生にご参加いただいたほか、東京大学未来ビジョン研究センターとの協働事業プログラム「フェロー」や、別の助成プログラムである「特定課題」「先端技術と共創する新たな人間社会」の助成対象者も加わり、総勢26名が一堂に会しました。

第1部は中間報告会として、8つのプロジェクトから進捗の発表がありました。コロナ禍で研究活動に制約がかかるなか、ねている様子がうかがえました。有識者の先生方もこの点を非常に高く評価し、プロジェクト後半戦に向けて激励の言葉をかけられていました。

続く第2部は「ニューノーマル時代と包摂社会——人と人との新しい連帯に向けて——」をテーマに据え、コロナ禍を経たいま、改めて「自己」や「自立」「主体」とは何かを考えるワークショップとしました。まず、話題提供として3つのプロジェクトに発表していただき、それらの内容を受けて全体ディスカッションを行いました。プロジェクトひと



国際文化会館庭園にて

テーマに、新しい社会に向けた取り組みを進める「仲間」であることが感じられたように思います。

ま た、今回のワークショップでは、夏の昼下がりを楽しむ時間も少々設けました。第1部の終了後、助成対象のプロジェクトメンバーでボダイケア講師の方に、5分間のストレッチ講座を行っていただきました。オンラインの方も画面越しに参加し、全員で凝り固まった身体をほぐし、リフレッシュした気分の後半の議論に臨みました。また、庭園に出でお茶を飲んだり、談笑をしたりと、助成対象者同士で交流を深めてもらうことができました。やはりオンラインだけでは得られない感触や経験があることを再確認する機会ともなりました。

本ワークショップの様子を収めた録画は、トヨタ財団YouTubeにて公開しています。ぜひご視聴ください。



公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



公益財団法人トヨタ財団ウェブサイト
<https://www.toyotafound.or.jp/>



UD
FONT

